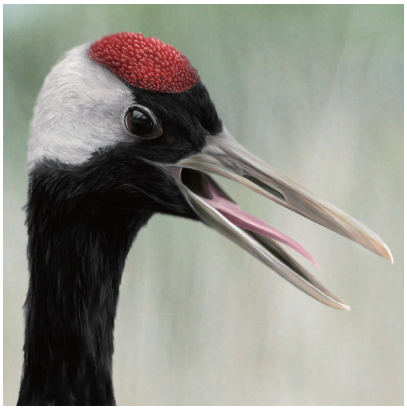


とかちの野生動物

Wildlife in Tokachi

2022

北海道国立大学機構 帯広畜産大学

野生生物保全管理技術養成事業

ヒグマとエゾシカ
Brown bears & Sika deer

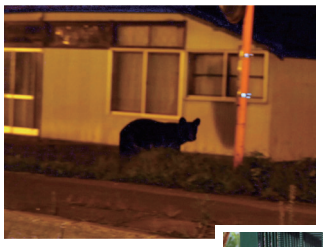
北海道のヒグマは、今

北海道庁による最新の推定（2020年度）では、北海道に生息するヒグマの個体数は約11,690個体（中央値）と見積もられています。2021年のヒグマによる人身被害は、死亡4人、負傷8人と、統計のある1962年以降で最多でした。総務省の2020年の調査では北海道173市町村の95%で過去5年間にヒグマの出没があり、80%の自治体で作物や家畜などの被害があったとの回答でした。北海道全域での農業被害額は2020年度で2億4,900万円でした。

繁みから現れたヒグマ

十勝のヒグマ

十勝では2010年6月に帯広市広野町で山菜取りの方が1人亡くなって以降、ヒグマとの人身事故で死亡した人はいません。ヒグマによる農業被害額は2019年度4,500万円で、主な被害作物はデントコーン、ビート、小麦などです。十勝全域では2020年度には150個体が駆除され、2021年度も10月時点で130個体以上が駆除されています。


広尾町に出没したヒグマ

罠で捕獲されたヒグマ

農耕地に出てきたエゾシカの群れ

道路に飛び出してきた雄ジカ

十勝のエゾシカ

十勝管内のエゾシカによる農業被害は2019年度には4億8,300万円でしたが、2020年度はやや増加して5億2,300万円でした。またエゾシカとの交通事故は重要な社会問題で、新聞報道によると2017年から増加を続けており、十勝管内での事故件数は2019年には299件で過去最多となり、2020年には249件に減少しましたが、人が死亡する事故も足寄町で1件発生しています。事故の傾向として、日没後の18時～20時に事故が集中し、9月～11月が事故の多い月でした。

キタキツネとエゾタヌキ

Red foxes & Racoon dogs

キタキツネのペア

十勝のキタキツネ

十勝ではキタキツネは山地の森林のみならず、農耕地や市街地にも適応して暮らしています。市街地や農耕地に進出したキタキツネは、トウモロコシやビートなどを食べる農業害獣として、あるいはエキノコックス症の媒介者として駆除されています。十勝全域では2020年度に2,979個体のキタキツネが有害鳥獣駆除されています。帯広市でも年間400個体の駆除を目標に、毎年200～300個体が駆除されています。

キタキツネと共に生きるために

エキノコックス症の媒介者や農業害獣としてマイナスイメージの大きいキタキツネですが、北海道観光のシンボルでもある美しく、愛らしい動物です。また天敵のキタキツネの数が減りすぎると、ウサギやネズミなどの小動物の数が増え、それらによる農林業被害が増加します。帯広市の一部の公園緑地ではエキノコックス駆虫剤が散布され、キタキツネを殺すことなく感染率を下げる試みが行われています。必要以上にその個体数を減らすことがないよう、キタキツネとの共存を考えてゆくべきだと思います。

ユキウサギを狩ったキタキツネ

雪の下のネズミを狩る
キタキツネ

観光客から餌をもらったキタキツネ

道路沿いで餌を待つキタキツネ

エゾタヌキのロードキル

キタキツネとエゾタヌキの交通事故

キタキツネとエゾタヌキは共に交通事故で死亡する個体が多い動物です。十勝の国道と高速道路では、2009年～2021年までの12年間で、キタキツネ1,438個体、エゾタヌキ616個体のロードキルが記録されています。キツネの事故数が多いのは北海道の特徴で、個体数の多さや人馴れ・道路周辺での餌ねだり等が原因であると思われます。観光客による餌付けは現在も多くの場所で行われ、道路沿いで餌をねだるキタキツネも多いため、ロードキルが多発しています。

ナキウサギ・エゾリス・エゾモモンガ

Pikas, Red spuirrels & Flying squirrels

十勝のナキウサギ

ナキウサギは氷河期の生き残りと言われる動物で、冷涼な気候の高標高地を好みますが、十勝では標高50m地点にも生息しています。分布が限られ、環境の変化に弱いため準絶滅危惧種（NT）に指定されています。人の生活圏と離れた場所にいるため、人との軋轢は他の動物ほど多くはありませんが、十勝では低標高に生息する個体の保全対策として人工的にナキウサギの住み処となる岩を配置した例もあります。

鳴くナキウサギ

ナキウサギ保護のための人工の石積み

帯広畜産大学のエゾリス

帯広畜産大学の構内に2017年9月から約3年間、アルビノのエゾリスが出現しました。美しく珍しい白いエゾリスを撮影しようと多くのカメラマンが訪れたことで、改めて人とリスの付き合い方を考える機会となりました。人とエゾリスが身近に暮らす帯広ならではの、エゾリスの都市化に関する研究は高く評価されており、国際的な雑誌に多くの論文が掲載されています。

大学構内に現れたアルビノのエゾリス（左上）と普通のエゾリス（右下）

母リスと子リス

アルビノのエゾリス

滑空するエゾモモンガ

二本の支柱間を滑空して渡れるエゾモモンガ専用道路横断構造物

エゾモモンガ

十勝のエゾモモンガ

エゾモモンガは夜行性のため人目につきにくい動物ですが、実は市街地のちょっとした公園緑地にも生息しています。帯広畜産大学の構内では2016年8月～10月の3カ月間の調査で、その年に生まれた24個体の仔も含めて、91個体が記録されました。帯広市には高速道路によって移動経路を分断されたエゾモモンガのため、世界的にも珍しいエゾモモンガ専用の道路横断構造物があります。

ワシ・タカ類
Eagles & Hawks

十勝のワシ・タカ類

十勝ではオオワシ、オジロワシ、クマタカのワシ類を見ることができます。このうち、オジロワシとクマタカは繁殖もしています。近年はオジロワシの繁殖個体が増え、2021年には少なくとも13カ所の巣が十勝で見つかりました。十勝で繁殖するタカ類は、オオタカ、ハイタカ、ノスリの3種類が主で、近年ではオオタカはやや減少傾向にあり、逆にノスリは急激に増加しています。ハイタカは増えたり減ったりを繰り返しています。

オジロワシ 成鳥

オオタカ 成鳥

オオワシ 越冬個体

十勝川ワシ・クルーズ

ワシ類と共に生きるために

冬になると十勝にはオオワシとオジロワシが越冬のためにサハリン等から渡ってきます。十勝川をボートで下るワシ・クルーズでは、オオワシ、オジロワシが毎回ほぼ100％の確率で観察できるほか、タンチョウも見ることができ貴重な観光資源となっています。ワイズユース（貴重な自然環境を保全しながら持続的に活用すること）を心がけ、保護だけに偏らず、地域振興の資源の一つとして、ワシ類との共存を考えていく柔軟性も必要ではないでしょうか。

タカ類と共に生きるために

オオタカとハイタカは準絶滅危惧種に指定されている希少な猛禽類です。平野部でオオタカ、ハイタカと共存するためには、植林後の年数の異なった林が必要です。オオタカが繁殖のために好むのは植林後平均45年のカラマツの林で、ハイタカが好むのは平均38年のカラマツの林やトドマツなどの常緑針葉樹の林でした。防風林は彼らにとって重要な繁殖の場であり、農地を風雪から守るだけでなく、生物の多様性にも寄与しています。

オオタカの巣と営巣林

オオタカのヒナと親鳥

ハイタカの巣と営巣林

ハイタカのヒナと親鳥

タンチョウ
Red-crowned cranes

タンチョウとは？

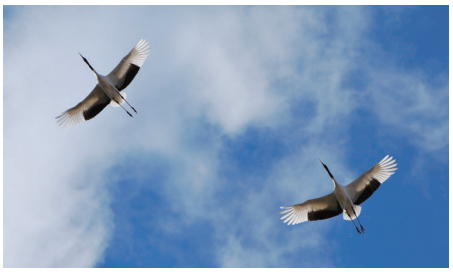
タンチョウはロシア、中国、北海道に約3700羽が生息する希少なツルです。北海道での増殖により、国際自然保護連合（IUCN）は2021年12月にレッドリストの段階を絶滅危惧（EN）から危急（VU）に引き下げました。北海道には世界中の半数を超える約1900羽が生息しています。越冬地が釧路阿寒に集中しており、鳥インフルエンザによる大量死の危険性から繁殖・越冬地の分散が必要です。

タンチョウの親子

十勝のタンチョウは、今

十勝地方では「タンチョウ十勝移住作戦」を1998年から民官学の協働で進めてきました。その結果、2021年12月の越冬タンチョウは釧路724羽、十勝135羽、その他地域40羽と釧路以外の北海道内では群を抜いて多い数でした。繁殖・越冬数は増加していますが、数が増え続ければ良い訳ではありません。増えたタンチョウは農業害鳥になる可能性があり、畑に現れたタンチョウが銃で打たれる悲劇も起きています。希少種の保護、観光利用、農業被害などプラス・マイナス両面を考え、いずれかの立場に偏りすぎない共存・共生のあり方を目指すことが必要です。

畑で餌をとる親子


タンチョウの飛翔

サロルンリムセ

タンチョウの舞い

タンチョウとSDGs

十勝川中流部でのタンチョウ保護活動は、SDGsの方針に沿って進められています。タンチョウのための人工湿地は、維持管理のためのCO2排出量を目標値の45%を大きく上回り、55%削減しました（SDGs13）。ヤナギ林に湿地ができ、生物種が138種類から205種類へと、生物の多様性が増加し（SDGs15）、タンチョウの飛来によりアイヌ民族の伝統であるサロルンリムセ（鶴の舞）が復活しました（SDGs17）。これらの取り組みは多方面で評価され、2021年には日本水大賞の環境大臣賞を受賞しています。

リーフレット作成協力、資料および写真・イラスト提供

アークコーポレーション株式会社、家入明日美、内田健太、大熊 勳、太田奈緒、大和田瑞穂、奥田 潔、おびひろ動物園、嘉藤慎譲、金井美穂、神谷小百合、木下 慎、坂本さや香、佐藤周平、塩原 真、鹿野たか嶺、嶌本 樹、添田若菜、高橋麗美、十勝川中流部市民協働会議、十勝毎日新聞社、野呂美紗子、濱澤颯太、平井克亥、広沢圭司、福谷麻方、北海道開発局、栁川 久（文責）、山口裕司、山﨑和夫、吉村和也

＊ 本冊子は「野生生物保全管理技術養成事業」の一環として作成されています
事業について詳しくはこちら https://www.obihiro.ac.jp/biodiversity

2022/04/10